

兵庫県大会最優秀賞

(中央大会奨励賞)

「心のアンテナを張る」

芦屋市立精道中学校 三年 竹原 理彩

ここ数カ月、考えさせられる出来事があった。私は塾に通う為、週四回電車を利用して。駅で週一回ほど五十〜六十歳くらいのある男性によく出遭う。その男性はサングラスをかけ、ハーネスをつけた盲導犬を連れて歩いている。テレビや本でしか盲導犬のことを知らなかった私は、実際に盲導犬はどうやって段差や歩行者を主人に知らせるのだろうと気になって目で追った。盲導犬は前に人がいると少し止まることで男性に知らせていた。私はえらいなと思うと同時に、盲導犬が止まる回数がとて多く、男性が歩きにくそうだと感じた。その理由はすぐにわかった。周りには男性のことを気にせず、たくさんの人が前を横切ったり、割り込んだりしているのだ。私は、なぜ気を配らないのだと嫌な気持ちになった。

だけどまた別の日、私は塾に遅れそうで慌てていた。そのとき急ごうとするあまり、足を悪そうにして歩いている女性の前を走り抜けた。女性は何事もなかったが、今思えばそれは盲導犬を連れている男性の前を横切ると同じくらい危険で、迷惑な行為だったと思う。しかしその時は心に余裕がなく自分の事しか考えていなかったのだ。誰だって悪気があってしている訳でもなく、意識していない訳でもない。でも心に余裕がないとそこまで深く考えないのだと思った。それはことわざにもある。『衣食足りて礼節を知る。』人は生活に余裕ができて、はじめて礼儀をわきまえるという意味だ。どんな時にも心に余裕を持つて行動したいと思った。

これもまた、駅での体験だ。私が乗った満員電車の中に、車いすの人が乗ろうとしていた。見るからにぎゅうぎゅう詰めで入らなそうだ。駅員さんが乗客に声をかけるが、みんな動けず舌打ちまでする人もいた。私も詰めようとしたがそんなスペースもなく、何も動かなかった。もう無理だなと思った瞬間、何人かの大人が電車を降りて場所をゆずった。

「僕達急ぎませんから。」

私ははっとした。勝手に乗れないだろうと決めつけ、何ができるか考えなかったのだ。車いすの人は申し訳なさそうにしながらも、会釈していた。きっとこの車いすの人は、同じような経験を今まで何度もしているだろう。乗れなかったこともあったかもしれない。施設はどんなバリアフリーになっても、暮らしやすい環境にはなっていないはずだ。きつい視線に耐えながらも、時にはあきらめ、時には頭を下げゆずってもらうことがずっと続くからだ。

これらの出来事を通して、言われてから動くのではなく、自分から考えて行動したり積極的に働きかけをしていくべきだと感じた。今まではその都度、駅員さんや障害者の方の

お願いを聞いてから動いていた。それで自分は良いことをしているのだと思っていた。だけど、それは当たり前のことをしているのにすぎないのだ。他人にお願いするのは勇気がいる。そして、それが言えずに困っている人達も世の中にはたくさんいるのだ。

自分が他人からして欲しいと思うことを他人にしてあげるのが当たり前であってほしい。人と同じ目線に立てる人間でありたい。常に心のバリアフリーを実践していける人間でありたいと思った。

世の中では、障害者や高齢者だけでなく多様な人達みんなが心地良く暮らせる社会が今、求められている。これからは、常に自分にできることを探せる目やアンテナを持って、社会の一員として行動していきたいと思う。